



○劇あそびをはじめるまで

幼稚園のお山の大きいきょうのきいろいろ葉も、赤いもみじの葉も、ひらひらと風に舞い、園庭に並んだすずかけの大きな葉っぱも茶色になって、ばさっ、ばさっと落ちて来る秋の或る日、私は、三年保育の子どもたちと一しょに、落葉をひろっては束ねながら、山のいちちょうの木の下で、こんな話をしました。

「いちちょうの葉っぱさんは、暑い夏には、みどりいろいろのきものを着ていました。みどりいろいろの涼しいきものを着

《劇あそび》

おやすみなさい

佐々木淑子

て、葉っぱさんたちは、元気にうたをうたったり、おどったりしていました。やがて涼しい秋がやって来ると、だんだんと、葉っぱさんたちは、きいらいきものを着ました。きいらいきものの方が、あたたかなのかもしれないね。きいらいきものを着て、葉っぱさんたちは、楽しそうにお話をしたり、日向ぼっこをしたりしていました。そのうちに、寒い風が吹いて来ました。葉っぱさんたちは、きいらいきものを着ていても寒くなってきました。そうして、何だか眠くなってきました。

『あ、あ、あ、眠くなったなあ』と、あくびをしたり、『寒くなったわ』と、ふるえていると、風のおばさんがやって来て、『さあさあ、葉っぱさんたち、もう、あなたたちのねる時が来ましたよ。わたしがみんなを、ねどこへつれて行って上げましょう。わたしのあとからついていらっしやいな。』と云って、風のおばさんは、さあーと吹いて行きました。すると、葉っぱさんの体が、すうっと浮いて、ひらひらとちようちようのようにとべました。『うわあ、おもしろいなあ、おばさん、まって下さいな。』と、葉っぱさんは云いながら、おばさんのあとについて、おりて行きました。そうして、ふわっと、とまった所は、やわらかい土の上でした。『さあ、ここが葉っぱさんたちのねどこですよ。おやすみなさい。』あとから、あとから、いちちょうの葉っぱが、ひらひらとおりて来ました。そうして、そこにもふわっと、ここにもふわっと、とまりました。風のおばさんは、『おやすみなさい』と、みんな

の頭をなでて行きました。葉っぱさんは、『おばさん、どうもありがと。』
『とてもいいきもちよ。』とてもあつたかいわ。『おばさん、おやすみなさい。』『おやすみなさい』って、土のねどこで、すやすやとねむりました。

今まで、葉っぱをひろうことに無中になっていた子どもたちも、きいろい葉をまばらにのこしたいちようの木をふりあおいでは、風によって落ちて行く葉のあとを追っていました。そして私は、その時に、今の話は科学的な説明からは程遠いものであったけれども、この話をもう少し発展させて、簡単な劇あそびにしてやってみたら、劇あそびをして楽しむことを通して、落葉という自然界の出来事に対しての関心を、より一層深める意味で、役立つかもしれないと思いました。それに、この頃は、三年保育の子どもたちも、大きい組の劇あそびを見たりして、自分たちも、それを真似て遊んでいけるし、劇あそびをするのに、丁度よい機会かとも思いました。

○劇あそびをはじめてから

- ・最初は、話の筋とは無関係に、勿論台詞なしで、みんな一しよに、音楽に合わせて、落葉や風のようすなどを、自由に表現してあそびました。
- ・おめんをつくるために、画用紙に自分自分で、好きな葉をかいて色をぬり、切り抜いておめんにしました。
- ・三歳児なので、葉は、いちようとかもみじとかに限らないで、自由にかせましたが、毎日ひろって遊んでいておなじみですので、多くの子どもは、いちようやもみじを、なんとかせらしくかきました。
- ・おめんが出来たので、「この間、お山でしたお話のような、葉っぱさんと風さんになって、劇をしましょうね。」と云うと、皆大喜びで、自分たちも劇をするのだというよろこびで、顔を輝かせていました。
- ・全体の人数を二つに分けて（同数ずつにする）、片方は葉、もう片方は風になる人にして、それを交替にしているようにしました。葉になる時

は、自分でつくったおめんをつけました。

- ・子どもの台詞はなしで、子どものリズム表現で劇の筋を進行させ、私達が、ピアノをひく合間や、ピアノをひきながら、お話をする事によって、それを助けるようにしました。
- ・私の解説付リズム劇の形で、二・三回やって馴れて来た頃に、「今度は、風さんがお話するところは風さんが言いましょうね。葉っぱさんがお話するところは葉っぱさんが言いましょうね。」と言って、子どもたちに言わせるようにしました。
- ・台詞は、私は何べんも話したのを覚えていて、それを言ったり、また、子ども自身で考え出して言ったりしましたが、その中から、出来るだけ簡単なものにきめて、葉っぱの言うところは、葉っぱになった人が皆一緒に言うようにして、気楽に声が出せるようにしました。
- ・子どもの台詞は、ごく簡単なものなので、言葉による表現の足りないところ

ころは、出来るだけピアノで補うように苦心しました。そうして、ところどころに、私の言葉もはさみました。

・このようにして出来上がったものは、大体次のようなものです。

《あらまし》

・きいろや赤にいろづいた葉っぱたちが、曲にあわせて、自由にもみじの表現をしている。

・曲が終ると、葉っぱたちは、「あ、あ、あ、ねむくなったなあ」とあくびをしたり、「寒くなったわ」とふるえるようすをする。

・そこへ、風が、曲にあわせて吹いてくる。

・「葉っぱさんたち、いらっしやい」と言つて、風は、葉っぱの手をとつて、曲にあわせて、ひらひらと葉のちる表現をする。

・その曲が終つた時に、風と葉っぱは、しゃがむ。

・風は、葉っぱの頭をなでて、「葉っぱさん、おやすみなさい」と言

う。

・葉っぱは、「風さん、どうもありがとう、おやすみなさい」と言つて、ねむりはじめる。

・静かな曲をひきつづける。

・この劇あそびが上手に出来るようになったので、或る日、もう一つの三年保育の組のおともだちが、遊びに来た時に、お客様になっていたいで、おみせしました。

○幼児の劇あそび集の脚本「おやすみなさい」

幼児の劇あそび集にのせてある「おやすみなさい」の脚本は、三年保育の子ど

もたちと遊んだ今の劇をもとにしてこれを四・五歳児向に直してみたものです。

この脚本では、二場に分けて、
第一場は、夏の場面
第二場は、秋の場面、とし、

登場するものとしては、風・葉の他に、小鳥を加えて、夏から秋への葉の変化と共に、一部の小鳥たちが秋になると南の国へとんで行くこともおみせしました。

このような構成にして、やってみただけではありませんので、実際に子どもたちがやってみたならば、いろいろと問題が起きてくることと思います。

(お茶の水大附属幼稚園)

近刊予告

文学博士 武政太郎先生監修
玉成高等保育学校長 有院 先生校閲

玉成高等保育学校幼児保育研究会編

フレーベルの恩物の理論とその実際

A五判三三〇頁
予価 四〇〇円
箱入上製本 千三百二円

フレーベル先生が創造された恩物について、著者の多年の研究の結果が、平明に説かれている。恩物の研究家、ならびに幼児教育者必読の書！

株式会社

フレーベル館